
~ 幸せすぎる、特進クラス ~

(*° p春菜q)~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～幸せすぎる、特進クラス～

【Nコード】

N3001I

【作者名】

(*)。 p春菜q()

【あらすじ】

ずっと憧れていた私立乙女公子高校に合格した内藤晴香は、

心友珠香から話してもらったウワサを聞いて、とても驚いた。

なんとその高校は、「3年に1度のイケメンクジ」というものがあるそうだ。

「3年に1度のイケメンクジ」とは、3年に1度行われるクジの事

で、

そのクジの一等をとれば、イケメン5人組と一緒に、3年間、同じ高校生活を送れるという。

寮も一緒。食事も就寝もすべて一緒。

そんな幸せな生活が、自分には送れる訳ないと諦めた晴香だが、引いた瞬間、とんでもない事実…!!？

あ…当たっちゃったあああ…!!!!

く幸せすぎる、特進クラスく

私は手元にある紙切れを握りしめ、

全身全霊で目の前の数字を追ってゆく。

探しているのは……

「1034」

の文字。

「……………!!!」

あつ…あつた…

受かったんだ…ついに…

第一志望のこの学校に、

私、内藤晴香は

受かったんだ。

その瞬間、私の目から、胸から、

溢れ出す涙と感動を、

こらえることは出来なかった。

く幸せすぎる、特進クラスく

「やったー！ーあつつつ！！！！アンタ、ついに受かったんだね

お姉さんはうれしいつつつ」

家に帰ればたちまち姉が、私の首に腕を回してきた。

そして、そのままぎゅっと抱きしめられた。

「ぐえええ…ぐるざい……」

私は女の子ではないような下品声をあげてしまった。

「あらっ。もぉ！！女の子が何て声出してるのっ

あの有名校に受かった子がっ”」

誰のせいじゃ……

私は、

ゼーゼー吐息をつきながら、

首を触り、そのまま下から姉を睨むような感じで見上げた。

だが、姉は興奮しきって私の視線に気づいてない。

だが正直、私も今はどんな事があっても怒れやしない。

だって2週間後には、

誰もが羨むあの名門学校の生徒一人に、

私はなれるのだから………

両親は共働きだ。

だから、きつと今日は二人とも

緊張しながら仕事を終えてきたのだろう。

だが、知らせを聞いた両親達は、

姉のように、恐ろしいぐらいの大きな声を上げ、

飛び跳ねながら喜んでいた。

「ホントかあ！？晴香！！」

「なんて素敵なんでしょう！！《鳶が鷹を産む》とは

このことね」

「よし！！今日はお祝いしよう！！友達も集めて家でパーティだ！！」

「本当！？お父さん！！」

「当然だろう！！何人呼んでもいいぞ！！」

「やったーーーー！！！！」

わたしはすぐさま携帯を取り出し、16人ぐらいにリダイヤルした。

そして二十分後、全員集まった。

「では、家の次女、晴香の受験合格を祝ってー！。

カンパーーーイ！！！！」

5人は母の友達、5人は父の友達、

そして、4人姉の友達、16人は私の友達、

総勢30名が、一気に乾杯して、お酒を飲み干した。

私と私の友達たちは、やっと高校生になる。

だが、軽いアルコールの入った飲物は、ノリで飲んでしまった。
苦笑)

悪いヤツ…

「ねえ、晴香。知ってる？そこの高校のウワサ。」

心友の珠香が、話を持ちかけてきた。

「えっ！？何何！？私何も知らないんですけど……（汗）。」
私は焦った。それは焦った。

「あのね、実は、こんなウワサがあるんだ……」
珠香は周りを気にすると、少しかがんで私の耳に口を近付けてきた。
私はそれに答えるように、その耳をじっとすました。

『3年に一度、大当たりクジをやるの。』

そのクジで当たれば…当たればね。

5人のイケメンと、3年間、ずっと一緒にいられるんだって。
もちろん、クジが当たるのは、一人だけで、

当たった人は、全校生徒から、【幸せすぎる、特進生徒】って
呼ばれるんだって!!』

「えええ〜!!!!!!待ってよ待って!!!!!!。。。。」

じゃあさ、寮も、3年間ずっと一緒???

「そのとおり。」

珠香は、コクンと頭を下げた。

「えっえっ。いいなあ〜っつ。」

私も【幸せすぎる、特進生徒】って呼ばれたいわあ〜。」

「でもそのクジ今年だから、晴香もクジやって当たれば

【幸せすぎる特進生徒】って呼ばれるようになるかもよ？（笑）」

「ムリだよお。あたしそこまで運よく無いわ。（苦笑）」

（くそ〜〜〜、今年あたしと同じ学年の奴が【幸せすぎる

特進生徒になるのかあ（悔）くそお！うらやましい——（羨）】（

だが私はこの後、思ってもよらない学校生活を送る事になるのだった。

入学当日。

前夜、私は興奮していて、まったく眠れていない。

だが今は、元気ハツラツだ。

(よし!!--いくぞ!!--えっと...口座振込依頼書はどこに出せば...

あ、あの人に聞いてみよ。(

「あのっ。すみません...」

「はい。なんでしょう。」

「依頼書はどこに出せば...」

「ああ、それなら、こちらですよ。」

私は、その人に案内された場所どおりに提出した。

「ありがとうございました。では。」

「ああ、お嬢さん。」

「はい。」

「クジでも引いてみませんか?」

.....?

これが.....!!--!!

私はまさに、これがイケメンクジだと思った。

「どうぞ。お金はとりません。遠慮なさらないでください。」

その時。後ろから、

「「「「「おめでとつ。「「「「「

という声が聞こえた。

振り向くと、スタイルがよく、とても整った上品な顔立ちの男の
5人組が、

こちらをみて微笑んでいた。

私はその瞬間、心をすっかり奪われた。」

「これから3年間、よろしくね。」

「今年は可愛い子だあ。」

「え、どれどれ？わあ、ホントだあ。」

「3年間って長いけど…」

「僕等に冷めず、仲よくしてね。」

私は返事も出来ず、その場に立ち尽くしたままだ。

その一人が、こちらを見てクスツと笑いながら言った。

「支配人。俺ら先に寮戻ってるから。彼女ちゃんと連れてあげなよ

「？」

「かしこまりました。おぼっちゃま。」

お…おおお…お坊っちゃま!?

なんだか凄いの絡んだっばい…… (汗)

『めっちゃ幸せだからね 羨ましいなあ〜』

珠香の聲が一瞬、頭の中に響いた気がした。

く幸せすぎる、特進クラスく

「まず、校長先生の話。

気を付けー！。礼！！！！」

「みなさん。御入学、おめでとうございます！外には、みなさんの入学を祝う、

桃色の桜が満開です。これから3年間、みなさんはこの学校で過し、

立派な成長をとげ、立派な成人に……………」

入学式中。私は、ずっとうわの空だった。

さっきの人達の名前を聞きたい。知って、仲よくなりたい。

珠香の言った事、本当なのかなあ。

本当だとすれば、どんなに幸せだろう。

初めて噂を聞いたときは、本当だと思ってた。

でも、クジが当たった瞬間は、単なる夢としか思えなかった。

自分の頬をひっぱってみる。

いたくて涙がにじみでる。

夢ではない。

現実だった。

私は、人生最大の幸運を掴んでしまった。

「ではこれにて、第37回、入学式を終わります。」

「気をつけー！。礼！」

「各クラスの担任の先生。よろしくおねがいます。」
「
周りが騒がしくなった。

私はボヤツとしたまま。

「おい、内藤。」

「はいっ。」

「おまえはこれからこの地図にある部屋へいけ。

頼んだぞ。」

先生らしき人から小さな紙切れを渡されると、

すぐにそのひとは消えてしまった。

どこにいくあてもなく、先生も見失ってしまったので、

仕方なく地図の場所へ行ってみた。

く幸せすぎる、特進クラスく

えっ…？ここって…寮じゃん…

しかも男子用？

戸惑った晴香だが、そこへ人が声をかけてくれたので、

助かった。

「どうしました？」

「あ、あの…先生にこの紙を渡されて、それでここに来て…。」

「ああ、晴香ちゃんだね。どうぞ。」

その人は、部屋のドアに手をさしのべてくれた。

顔を見れば、何とさっきの5人組の1人、

クスツと笑ったあの人だった。

「あっ…あなたはさっきの…」

「そう。もう覚えてくれたんだ。仲間が待ってるから、

どうぞ。中へ。」

私は恐る恐る、でも少し興味が湧いてきて、

わくわくしながらドアを開けた。

その途端、とても眩しいくらいに輝いたあとの4人が現れた。

「おかえり！翔くん。」

「おお！同棲メンバー発見！」

「つれてきたの？」

「おかえりなさいい」

私は目を見開いた。

素敵な人達と、素敵な部屋に。

「今日から3年間よろしくね。晴香ちゃん。」

「はいつ。」

私は思わず名前をよばれたので、驚いた。

「おっ、驚かないで。」

「そりゃ驚くよ。こっち自己紹介してないじゃない。」

「あ、そうか。」

「じゃあ順番に…」

「あ、晴香ちゃん、そこ座ってて。取りにいきたいものがあるから。」

「

私はすぐそのソファに腰を降ろした。ふつかふかだ。の高級ソファかもしれない。

すぐ横をみれば、とびきりの美形。

私は胸の奥が鳴った。

「あ、あったあった。これだよ、晴香ちゃん。」

私はその人が持ってきたものに食いついた。

それと同時に、これからの生活に胸を膨らました。

く幸せすぎる、特進クラスく

彼が持ってきたのは卒業アルバムだった。幼稚園のものもある。

「これは…?」

「これは僕達が小さい頃からのアルバム。見て。このページ。」

私は素直にのぞきこんだ。

リムジンに乗って幼稚園にくる小さい5人。

他の人達とは全く違う食事をしている豪勢な5人。

キヤーキヤー騒ぐ生徒たちに笑顔で迎える大人な5人。

球技大会で、素晴らしいサーブを打って庭球をしている5人。

中庭で読書をしている5人。

他にもまだまだたくさんある。

そしてクラスページになった。

だが、その肝心な5人の写真が見付からない。

「あの…?」

「ああ、僕達はね、そっちじゃなくて、こっち。」

彼はまた別のアルバムを持ってきた。

表紙には、『特進クラスアルバム』と書いてあった。

は？

「めくってごらん。」

彼が言う。

私はまた素直にめくった。

目に飛び込んできたのは、5人の顔写真。

写真の下に名前が書いてある。

一人目は…え〜っと、

「斎藤…翔？」

「はい。僕だよ。」

さっきから、活発に喋っている彼は、MCみたいだった。

「僕等の中で、一番頭がいいの。」

おっとり系の人がいった。

「今のは、大上智くん。おっとりしてるけどね、やらせれば歌もダ

ンスも絵もうまい。演劇も出来るんだよ！」

「今喋ったのが、西山和也くん。器用なんだよう！トランプマジックが大好き。あとゲームも大好き。楽器も出来るんだよね？」

まだ3人目の紹介だが、私はいい加減頭がこんがらがってきた。

「ほらあ、喋りすぎだよ。こんがらがってるじゃん（笑）」

「あつ。ごめんね！晴香ちゃん！」

「え…えええ…大丈夫です（汗）」

「いいんだよ。ムリしなくて。」

私は頭をぼんぼんと叩かれた。

「じゃあ、丁寧に最初からね！」

5人は立ち上がって順番に並んだ。

「僕が、斎藤翔。一応大卒です。」

みんなが、ピーーーーーと口笛を吹いて、拍手をした。

「僕は、大上智。歌と踊りと芸術は任せて！！」

またもやみんなが拍手をした。

「僕は西山和也。トランプマジックにハマってます。楽器も一応弾

けます。ゲーム大好き！」

パチパチパチパチ……

「僕は前川潤。Sだけど、真面目でクール呼びをしてください（笑）
ロマンチックは任せて！」

パチパチパチパチ……

「僕は阿部雅紀！！すぐにテンション上がっちゃうんだ でも涙も
ろいんだよ（苦笑）あ、あと動物大好きです！！御世話は僕に任せ
てね ！！！」

「それじゃ、君の自己紹介きこうか。」

「あ…えと、あたしは内藤晴香です。こんな幸せなクジに当たって
しまっ……」

正直、まだ少し実感わかないんですが、3年間、よろしく願いますっ！！！」

私を見て、みんな拍手してくれた。

「しっかりしてるう……！！！」

「わからない事があつたらなんでも聞いて！！！」

「可愛い……」

「よろしく……！！！」

「よろしくね!!」

私は、とても幸せだった。満面の笑で答えた。

「ヨロシクお願いします!!」

いつの間にか、私のからだからは、緊張が消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3001i/>

～ 幸せすぎる、特進クラス ～

2010年12月10日19時53分発行